

## 秋田県大潟村の学社融合の実践に関する研究 －3年間の教育教材開発の成果と課題－

薄井 伯征  
(大潟村干拓博物館)

### 【要旨】

本稿は、秋田県大潟村において、村の歴史を後世に伝えるために行われた学社融合による教育教材開発について、3年間の実践の過程を整理し、その成果と課題を検討したものである。その結果、①少人数のグループによる学習支援とフィールドワークが事業の円滑な進行に有効である、②開発した教材のうち、紙芝居は今後の継続性と発展性を見込むことができる教材である、③学社融合による教育教材開発の実践とその継続は、地域に歴史を再認識させ、そして継承していくことの動機付けとなる、と考えられた。さらに、新しい学習指導要領への移行期にあたることから、今後どのような形で学社融合事業による教材開発を継続し、地域全体でその成果を共有し、地域の歴史を学ぶことの意味を地域に定着させるのかが課題と考えられた。

### 1. 問題の所在

学社融合の活動は、地域的課題の中に学習目標を見いだし、知識やスキルをもつ地域住民が学校とともに児童・生徒の興味関心にあわせた方法や内容を検討し実践していく、学校と地域社会の協働事業である<sup>1)</sup>。秋田県大潟村は八郎潟干拓事業により昭和39年に誕生した日本で最も新しい自治体であり、昭和42年から5回にわたり国により入植事業が行われたが、現在、世代交代が急速に進んでおり、八郎潟干拓と大潟村の歴史を入植者以降の世代へ継承することが村の地域的課題の一つとなっている。そこで大潟村では大潟村干拓博物館（以下、干拓博物館）が中心となり、文化庁の支援<sup>2)</sup>を受け、地域的課題の解決の一手法として、平成18年度から博物館・地域住民・中学校の学社融合により、地域の歴史を後世に伝えるための教育教材の開発が行われている。開発は干拓博物館のマネジメントのもとで実施され、毎年7～10月に大潟村立大潟中学校（以下、大潟中学校）3年生の選択社会の授業において、教材の中核となる部分を中学生が創作する形式で行われている。実際の授業では、干拓博物館収蔵の写真等の資料を使用し、歴史指導や創作支援等到大潟村案内ボランティア（以下、案内ボランティア）などの地域住民が参画しているのが大きな特徴である。今まで開発した教材及び学習支援者を第1表に示す。これらの教材は、村の歴史を後世に伝える観点から家庭で活用してもらうため、村内の全世帯に配布している。

筆者はこれまで、学社融合によるこれらの教育教材開発の実践における企画立案、マネジメント、原案の教材化を担当してきた<sup>3-5)</sup>。その結果、大潟村における学社融合によるこれらの教材開発は、家庭や村内において村の歴史や資料等の文化資源の再認識と理解を促し、さらに多くの方々に、実践における連携と協働の力を理解してもらえる点において非常に有効であった<sup>6)</sup>。併せて、中学生と学習支援者の主体性や創意工夫を育む効果もあると考えられた<sup>7)</sup>。

学校と地域の連携に関する実践については、大潟村だけでなく全国各地で多様な取り組みがなされ、それらの実践の内容や成果を紹介する出版物も多い<sup>89)</sup>。しかし、地域的課題の解決のため、その地域で何年も同一のテーマで学社融合事業を実践し、その成果と課題について研究している例はきわめて少ない。本稿では、秋田県大潟村における学社融合による地域の歴史を後世に伝えるための教育教材開発の実践をふりかえり、地域住民との連携による学習支援、完成した教材の利活用、「歴史を後世に伝える」意識の醸成の観点から、教材開発事業の成果と課題について検討する。

**第1表 学社融合の実践により開発した教材と学習支援者**

| 年度      | 開発した教材の名称 | 学習支援者                                                        |
|---------|-----------|--------------------------------------------------------------|
| 平成 18 年 | 大潟村歴史かるた  | 大潟村案内ボランティア（歴史指導）<br>大潟村白鳥短歌会（かるた読み札創作指導）                    |
| 平成 19 年 | 大潟村歴史すごろく | 大潟村案内ボランティア（歴史指導）<br>コーディネーター（意志決定支援）                        |
| 平成 20 年 | 大潟村歴史紙芝居  | 大潟村案内ボランティア（歴史指導）<br>コーディネーター（意志決定支援）<br>イラストレーター（紙芝居イラスト描画） |

## 2. 教材開発の事業展開

教材開発は大潟中学校 3 年生の選択社会の授業で行われた。開発した教育教材とその特徴を第2表に示す。実施期間は毎年7～10月であり、年度により異なるが、授業時間数は11～16時間、選択した生徒数は25～27名であった。毎回、授業が始まる前に授業計画や進め方、学習支援者の役割分担について打ち合わせが行われた。3年間の基本的な事業の流れは次の通りである。

### ①オリエンテーション（中学校での授業）

授業の目的と授業の進め方の説明を行う。

### ②歴史を学ぶ（中学校での授業）

干拓博物館の収蔵資料を活用し、案内ボランティアが中学生に村の歴史の学習を支援する。

### ③教材の原案を創作する（中学校での授業）

教材の「核」となる部分を、中学生が学習支援者とともに創作する。

（第2表における「中学生が創作に関わる部分」を参照）

### ④教材の原案を発表する（中学校での授業）

### ⑤原案を整理し、教材化する（干拓博物館が実施）

### ⑥教材を村内全世帯に配布する（中学生が放課後に実施）

これら一連の過程において、筆者は企画立案、マネジメント、原案の教材化を行った。ここでマネジメントは、単なる学習目標の設定や時間配分の明確化だけではない。具体的には①村の歴史を生徒にどのように興味をもってもらうか、②生徒が学んだ歴史事項を教材創作のどの場面で活かすか、③①や②の過程で学習支援者の特色を生かしてどのような支援ができるのか、の準備と調整である。

①においては、案内ボランティアから生徒の祖父母の話題を提供していただいたり、博物館収蔵の八郎潟干拓の記録映画と一緒に鑑賞したりし、初めて知る村の歴史への興味を喚起させ、歴史を学ぶことへの導入とした。②においては、生徒が歴史を学び、感じた部分を教材の中でできるだけ具現化したいと考えた。かるたづくりでは「絵札の写真の選択」「短歌形式での読み札作成」、すごろくづくりでは「マス目の写真の選択」「すごろくのルールづくり」、紙芝居づくりでは「シナリオの創作」「背景の写真の選択」の作業が、生徒が教材開発で担った部分である（第2表）。③においては生徒をグループに分け、グループごとに「八郎潟干拓工事」等のテーマを設け、授業の前半は案内ボランティアが対話形式で授業を進める形とした。また「すごろく」「紙芝居」の原案創作においては、生徒の合意形成や意思決定を促すためにコーディネーター（入植者二世、生徒の父母の年代に相当する女性）2名を配置し、生徒の中に入り、生徒が学んだ成果を具体的な形にする支援をしていただいた<sup>10)</sup>。

最終回の授業では、学習支援者が全員招待され、原案の発表が行われた。完成した原案は筆者が歴史の解説等の情報を付加し、親しむことができるデザインで教材を印刷発注した。完成した教材（紙芝居の場合は全世帯配布用の冊子版）はお正月前に中学生が手分けし、村内全世帯に配布した。

第2表 開発した教育教材とその特徴

| 項目            | 大潟村歴史かるた <sup>11)</sup>                                                         | 大潟村歴史すごろく <sup>12)</sup>                                                                     | 大潟村歴史紙芝居 <sup>13)</sup>                                                                |
|---------------|---------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------|
| 教材としての特徴      | ①絵札と読み札から構成されている。<br>②読み手が読み札を読み、読み札に対応する絵札を取る。取った枚数を競う。<br>③子どもから大人まで参加して楽しめる。 | ①盤にマス目がある。サイコロを振り、出た目の数だけマス目を進み、ゴールまでの早さを競う。<br>②マス目には「1回休み」等のルールがある。<br>③子どもから大人まで参加して楽しめる。 | ①大きな紙に一定の枚数に分けて、その物語の場面ごとに絵が描かれ、演者が語りかけながら一枚ずつ順にめくってみせる。<br>②上演を見る形となるが、子どもから大人まで楽しめる。 |
| 大潟村で開発した教材の特徴 | ①絵札に写真を用いている。<br>②絵札の裏に写真の解説を掲載している。<br>③読み札は五七五七七の短歌形式。                        | ①「歴史編」「生活編」の2テーマとし、表裏に印刷。<br>②マス目に写真を用いる。<br>③マス目の写真について、クイズ形式の解説書を添付。                       | ①歴史に関する5つのストーリーを創作する。<br>②紙芝居の背景が写真で、登場人物のイラストを重ね合わせる。<br>③紙芝居の冊子版を作成。                 |
| 中学生が創作に関わる部分  | ①3グループに分かれてテーマに沿って歴史学習。<br>②かるたの絵札に相当する写真の選定。<br>③読み札を短歌形式で創作。                  | ①2グループに分かれ、テーマに沿って歴史学習。<br>②グループごとにすごろくの原案を構築。<br>③すごろくのルールとクイズを創作。                          | ①創作するテーマごとに5グループに分かれ歴史学習。<br>②グループごとに紙芝居のストーリーの創作。<br>③紙芝居の背景の写真の選定。                   |
| 教材をつくる上での特徴   | ①「絵札」「読み札」一枚一枚のピースづくり。<br>②歴史上の特定のシーンを掘り下げて学習することができる。                          | ①「歴史」「生活」のテーマに沿って、歴史上の主要事項の写真を選択し、その解説やルールを創作する。<br>②歴史の流れを学び、「すごろく」の盤の上に表現できる。              | ①グループごとにテーマに沿って紙芝居のストーリーを構築する。<br>②歴史上の特定のシーンを掘り下げて学習することができる。                         |

### 3. アンケートの実施

事業終了後、学習支援者（案内ボランティア）と選択社会受講生を対象にアンケートを実施した。アンケートの主な質問項目と回答者数を第3表に示す。なお、考察に用いなかったアンケートの質問項目は割愛している。

第3表 アンケートの主要な質問項目

|          |      | 学習支援者（案内ボランティア）対象                                | 生徒対象                   |
|----------|------|--------------------------------------------------|------------------------|
| 平成 18 年度 | 質問項目 | ①中学生と接して感じたこと。<br>②「連携」「協力」の観点から感じたこと。           | 実施せず。                  |
|          | 回答者数 | 6名                                               | －                      |
| 平成 19 年度 | 質問項目 | ①中学生と接して感じたこと。<br>②村内の様々な立場の方々が共通の目標に取り組んだことの感想。 | 案内ボランティアからお話を聞いたときの感想。 |
|          | 回答者数 | 7名                                               | 26名                    |
| 平成 20 年度 | 質問項目 | ①中学生と接して感じたこと。<br>②村内の様々な立場の方々が共通の目標に取り組んだことの感想。 | 案内ボランティアからお話を聞いたときの感想。 |
|          | 回答者数 | 8名                                               | 23名                    |

### 4. 考察

#### (1) 地域住民と連携した学習支援の成果と課題

平成 18・19 年度の教材開発の授業において、学習支援者である案内ボランティアが中学生と接して感じたこと（第3表の質問項目①）は、案内ボランティアからの問いかけに対して中学生の反応が弱いことであった<sup>14)</sup>。かるた創作では6名中5名、すごろく創作では7名中5名と、ともに半数以上が中学生と接したときの反応の弱さを指摘していた。その一方で生徒は、案内ボランティアによる歴史学習支援について、平成 19 年度のアンケートでは「大潟村の歴史などで、自分の知らない部分を詳しく聞くことができて貴重な体験だった。」「村について分からなかったことが分かって良かった。意外な事実もいっぱいあってびっくり！」などと回答しており、「役に立たなかった」「つまらなかった」などの回答はみられなかった。そして、授業最終回の教材の原案発表においては、案内ボランティアは授業中に提供した話題や内容について、これらの教材の中に凝縮・表現されていることに驚き、そして中学生の視点や発想を高く評価していた<sup>15)</sup>。すなわち、教材をつくる意欲や創意工夫、能力があるからこそ、授業における生徒の反応の弱さが、学習支援者にとって物足りない部分として映っていた。

筆者はその反応の弱さが、地域住民が中学生に学習支援をする上で障害要素となる可能性を指摘してきた<sup>16)</sup>。そこで平成 20 年度の紙芝居創作では、学習支援者と生徒との距離を縮めるため、当初から5人前後のグループに分かれて授業を行った。案内ボランティアに対するアンケート（第3表の質問項目①）によれば、反応が弱いという主旨の回答をした案内ボランティアは8名中2名となり、その割合は前年度までと比べて大幅に減少した。そして案内ボランティアから「生徒の反応が見えてよかった。教える授業から語り合える授業といったように思えた。」「とても良かった。雑談しながら話を進めていけたと思います。」などの回答が寄せられ、中学生に対しての「反応が弱い」という印象に一定の歯止め



をかけることができた。一方中学生は案内ボランティアによる学習支援について、平成20年度も好意的に受け止めていた。アンケートに対し、「とても詳しくて楽しかったです。その場で質問したり、自分の意見を話したりできたので良かったです。」と回答した生徒もいた。すなわち少人数グループの授業により、学習支援者が以前に感じていた「反応の弱さ」を完全に払拭するまでには至らなかったものの、生徒と学習支援者の距離が以前より縮められ、そしてコミュニケーションの円滑化がもたらされたと考えられる。さらに生徒に対するこの認識の改善は、案内ボランティアにとって、中学生に対して歴史を伝えることの意義を自ら再認識するとともに、第三者に対して学習支援をする意欲を維持することにつながるものであり、案内ボランティアの活動の活性化をもたらすものに他ならない。一方中学生にとっても、少人数グループによる学習は積極的に質問や意見を出しやすいと考えられる。このような少人数グループ別の学習支援手法は、生徒及び学習支援者双方にとって大きなメリットとなり、充実感が得られるものとなった。この実践手法は、今後も学社融合事業を継続してすすめていくうえで、地域住民の理解と協力が得られやすい有効な手法であろう。

また平成20年度の紙芝居の創作においては、歴史を学ぶ一助とするため、中学生と案内ボランティアによるフィールドワークが初めて行われた。これは、グループごとに案内ボランティアと生徒がグループのテーマに沿った歴史の舞台を訪ねる取り組みである。フィールドワークの実践については、平成18年度より案内ボランティアから重ねて要望されていたものが、平成20年度に放課後ではあるが初めて実施できたものである。このフィールドワークは大きな効果をもたらした。中学生にとっては、実際の歴史の舞台を直接見て、触れて、感じる機会が得られ、様々な場所や内容に興味関心を示し、活発に活動していた。そして案内ボランティアは中学生のその活発な姿を目の当たりにし、中学生の意欲と感性や視点を感じることができた。さらに中学生は、フィールドワークで得られた知見を紙芝居の中に柔軟に、そして巧みに取り込んでいた。すなわち地域住民とのフィールドワークは、学習の進行の観点に立てば、中学生と学習支援者の距離を縮めたのみならず、今後の教材開発の学習をすすめるうえでも大いに貢献した。さらに歴史認識の観点に立てば、ふだん何気なく見過ごしている部分の歴史的な経緯やその存在意義に中学生が気づき、学校や家庭で歴史のふりかえりや話題の共有がもたらされたと考えられる。地域全体で地域の歴史をふりかえるためにも、フィールドワークは有効であろう。

今まで実践された教育教材開発は、多くの学習支援者との連携により行われたものである。かるた、すごろく創作時においては、学習支援者は様々な個人・団体と協力・連携して事業を実施することの意義とその成果を認識してくれていた<sup>17)</sup>。紙芝居の創作においても、アンケートの設問（第3表の質問項目②）に対し、学習支援者からは「1人が2人、2人が3人と、人と人との力が加わって、それぞれの個性ですばらしいものができあがる。『1人1役』協働の力はすばらしい結果を生むと思います。」などの回答があり、否定的な意見はなく、連携の意義を理解している傾向は変わらなかった。むしろ、教材開発事業が3年間継続され、その成果を村内全世帯に届けることができたことから、中学生を含めた村内の様々な個人・団体が連携した学習を展開できることが、学習支援者にとっては当然のことのようにとらえられるようになったと考えられる。

しかし、連携による事業の円滑な実践の裏には、関係者全員の目標の共有とともに、緻

密なマネジメントが要求されている。事実、この3年間は毎年異なる教材の開発であり、当然マネジメント手法も毎年変わるものであった。筆者は学習支援者、教師、生徒を対象に毎年アンケート調査を実施し、出された意見をもとにPDCAサイクルを検討し、改善を図り、実践を試みている。事業を進めていく中で、事業の指揮・進行や関係者間の連絡・利害調整、異組織どうしの連携の構築には、当初の計画変更を余儀なくされたり、あるいは試行錯誤しなければならない点もあった<sup>18)</sup>。学社融合事業の目的を達成するためには、マネジメントを担う立場として、事業進行上で求められる状況判断をどのように行い、円滑化を図ったらよいのか。これらの状況判断の整理と普遍化が課題である。

## (2) 開発した教材の利活用の成果と課題

大潟村における学社融合による教材開発の実践がもたらした成果のひとつは、中学生が、地域の歴史を学んだ上で、地域の歴史と中学生らしい感性や視点を融合させた教材が完成し、その教材を地域住民と共有できたことである。

これらの教材（紙芝居は冊子版）は、お正月前に村内全世帯に配布された。すごろくをすり切れるほど何度も遊び、「村の歴史は知らないことばかりでした。」と述べた小学生もいた<sup>19)</sup>。また教材は小学校・中学校の授業や幼稚園、公民館主催の週休二日制事業<sup>20)</sup>などでも広く使われており、今まで開発した教材は村内の様々な場所で様々な機会に活用されたといえる。しかし、案内ボランティアの一人は、小学生の孫といっしょにかかるた遊びをして、「せっかく中学生が創作した読み札の部分を全部読んでからかかるたとりをしたいのに、すぐに絵札が取られてしまう」と述べており、「遊ぶ行為」に主眼が置かれてしまうケースも少なからずあった。

家庭でかるたやすごろくで遊んだ場合、その遊びのルールからどうしても「早く絵札を取る」「早くゴールする」ことに主眼が置かれてしまいがちである。村の歴史に遊びを通じて親しむ観点からは、かるたやすごろくに印刷されている写真や解説を通じ村の歴史の一端に触れることができるので、教材としてのかるたやすごろくはその目的が達成できたと思われる。しかし、遊びを通じて興味がある部分を掘り下げたり、歴史の流れに沿って理解することは難しい。また、かるたとすごろくの場合、例えばかるたの枚数を10枚増やしたり、すごろくのマス目を10マス分長くするなど、現在ある教材の内容を追加・充実することも難しく、結果的に発展性に乏しい。さらにほかの遊び方もないことから、完成した教材の有効活用の範囲が限定的となってしまう。かるたやすごろくは、ここが地域の歴史を伝えるための教材としての限界であろう。

一方平成20年度に開発した紙芝居は、小中学校や幼稚園等に配布され、その内容をまとめた冊子版も全世帯に配布された。すなわち紙芝居は、公共空間では上演により楽しむことができるようにし、家庭では紙芝居の内容を家族で共有できるように工夫している。紙芝居の上演は平成21年1月から3月までの間、幼稚園や小学1年生の授業、公民館主催の週休二日制事業などで早速行われ、好評であった<sup>21)</sup>。また家庭に配布された冊子版の紙芝居は1人でも楽しめるものであり、子どもといっしょに読んだり、読み聞かせをした父母もいた。さらに、子どもたちばかりでなく入植者も手に取り、家族や知人を紙芝居に登場させてくれたとして大変喜んだ家庭もあった。このように紙芝居についても村内では一定の活用が行われるとともに、紙芝居冊子版の配布により、村の歴史をテーマにした創作が

注目されたといえる。しかし、本は一度読んでしまえば終わり、というケースも少なくないと考えられる。紙芝居（冊子版）を一度読んだだけでお蔵入りさせず、紙芝居とその内容をどのように継続して利活用していくのが次の課題となる。

紙芝居は、特定の空間のなかで、演者による上演を楽しむだけにとどまらない。紙芝居のストーリーを生かし、演劇・朗読劇・人形劇など、演出手法を工夫することにより、中学生が創作した紙芝居の魅力は大きく増し、かるたやすごろくよりも多くの場面で利活用ができると考えられる。実際、紙芝居のストーリーを生かしたミュージカルなどを行ったら素晴らしいのではないかと述べた村民もあり<sup>23)</sup>、今後の利活用の広がり期待がもてるものである。また紙芝居は、平成20年度は5話の創作に終わったが、機会があれば今後何話もの創作を追加し、充実させることができる。後述するが大潟中学校では平成21年度も引き続き、紙芝居の続編の創作を3年生が選択社会の授業で取り組む予定となっている。今後の事業継続により一層の充実が図られる教材といえよう。

### (3) 大潟村における「歴史を学び伝えること」の意識の醸成と課題

大潟村において入植者の後継者以降の世代は、八郎潟干拓と大潟村の歴史、そして入植者の歩んできた道のりについて、あまり関心を持たずにいるのが現状であり、歴史認識や継承という観点に立てば入植世代との大きなギャップがある<sup>24)</sup>。大潟中学校の校長は生徒と接するなかで、自分の祖父母の出身地を知らない生徒がいることを知り、生徒が地域を思い、そして誇りを持つためにも、地域住民との関わりの中で、村の歴史を生徒に伝えていくことが、地域の特色を生かした中学校の学習活動になると考えていた<sup>25)</sup>。さらに、大潟村には高校がない。幼稚園から中学生までほとんどいっしょで、高校生になった瞬間にばらばらになってしまう。このような地域性の中で、中学校卒業までに地域の歴史を学ぶ取り組みができないだろうかとの思いから行われた授業が選択社会における教材開発であった。

教材開発の授業の実施は、大潟村にとって大きな意味をもっている。すなわち中学生にとっては、自分のルーツを知ることのきっかけを与えてくれるものであり、そして入植者世代からお話を聞くきっかけやその意味を理解するきっかけを与えてくれるものであるからである。すなわち村をみつめ、村の歴史を学ぶことの動機付けとなる。このことについて、校長は次のように述べている<sup>26)</sup>。

12月末に村内全戸にお届けした「大潟村歴史紙芝居〈冊子版〉」をご覧いただけただしょうか。今年度も干拓博物館事業とタイアップし、本校3年生が制作にかかわらせていただきました。この紙芝居は「創村にかかわる貴重な史実」と「大中生<sup>26)</sup>の発想豊かな創作物語」との融合、「過去の映像資料」と「村の若い人材による現代イラスト」との融合による、類まれな教材となりました。選択社会科として行うこの歴史学習は3年間継続し、本校教育の誇れる取組の一つになっています。また、間もなく大潟村を出て多方面の高校に進学していく3年生にとっては、自分のふるさつを見つめ直す大切な学習です。（中略）役場・博物館の全面的な支援と案内ボランティアの方々の丁寧なご指導に心から感謝申し上げます。

では実際生徒にとって、歴史を学ぶことの動機付けは確立されたのだろうか。前述したように、アンケートの結果からすれば、案内ボランティアの支援を受けての歴史学習は、歴史を学ぶことに対しては平成19・20年度ともに肯定的意見であった、しかし、アンケートはあくまで「紙芝居づくり」のなかの歴史学習について感想を問うたものであり、この結果からは中学生が村の歴史を学ぶことの動機付けになったとは判断できない。そこで、生徒が書いた「私の故郷」と題した作文から考察してみたい。この作文は、平成20年の選択社会受講生のうち1人が、選択社会の授業とは別に書いたものであり、東北電力により主催された作文コンクール<sup>27)</sup>に応募して佳作に入選したものである。以下にその一部を抜粋する<sup>28)</sup>。

かつては日本で第二の湖だった八郎湖が干拓されて、この大潟村ができました。わたしたちの祖父母が、この地に、大きな夢と希望をもって入植しました。我が家は新潟からこの秋田に来ました。祖父母は（中略）北に行くのはかなりの決心が必要だったと聞いています。そして今は大潟村が本当の故郷になったと言っています。

私たち家族にとって、宝物のような故郷、大潟村ですが、実は去年まで私はあまり大潟村が好きではありませんでした。村内にデパートなどがないので、買い物に行くには、必ず村外へ行かなければなりません。（中略）他の地域の中学校をうらやましく思うことや、「大人になったら、絶対大潟村から出る！」と考えていたこともありました。また、大潟村の「村」という文字さえも、ここが田舎だと強調しているように思えて嫌気が差してしまうときもありました。しかし、中学校三年生になり、学校の授業で大潟村の歴史を勉強してからは、今まで「好きではない」と思っていた気持ちが一変しました。八郎湖を干拓するのは、すごく大変だったという話を聞いて、早く大潟村から出て行きたいと思っていた自分がとても恥ずかしくなりました。

いつも、当たり前のように見えていた自然や景色。それをよく見てみると、今まで気づかなかった様々なものに気づくようになりました。（中略）それを知らない人がたくさんいる反面、私たちがそれを知っているということは、素晴らしいことだと思います。（中略）

豊かな自然・景色、おいしい食べ物、笑顔やあいさつ、たくさんの笑い声、そして大切な家族。それを全部あわせたのが、大潟村。そして、それが私の故郷です。

上記の内容から、この生徒は、祖父母の入植の経緯と大潟村の歴史について家族で話題を共有し、大潟村の歴史について、そして家族と故郷の大切さと素晴らしいさについて改めて認識できたことが読み取れる。選択社会科における「紙芝居」創作を通じて、ふるさとを自らの視点でとらえている意識が醸成されつつあるといえよう。

中学校社会の学習指導要領には、「身近な地域の歴史や具体的な事象の学習を通して歴史に対する興味や関心を高める」ことが謳われている。しかし中学生にしてみれば、入植者世代が求めている「村の歴史を学ぶ」ことについては、高校入試の科目や内容と異なることから、学習の動機付けが弱い。すなわち、現時点では主要教科と比べて学習の優先順位が低く、生徒も当初は地域の歴史を学び、かるたやすぐろく、紙芝居をつくることの必要

性をそれほど感じていなかったのではないだろうか。

しかし、これらの教材開発の取り組みは、地域住民から歴史を学び、生徒どうしで合意形成をしながら創造性を求め、地域住民と連携して形にする授業展開である。歴史をテーマにした中学生の学習活動を、地域住民がひとつの形として成り立つまで熱心に支援し、その成果が広く第三者に利活用され、評価された。その経過を中学生は肌で感じていた。すなわち、「地域の歴史を後世に伝える」目的での学社融合による教材開発とその利活用は、地域全体で地域の歴史への関心を高め、地域の歴史を学ぶことへの理解を促す良い手段の一つであるといえよう。そして学社融合による教育教材開発の継続は、多くの地域住民に、地域の歴史をふりかえり、学び、その歴史に魅力を付与し、継承していくことの動機づけをもたらすと考えられる。このことは、地域の歴史を後世に伝えていく大きな原動力となるだけではない。中学生は創作活動を通じ、自分から主体的に行動すること、そして想像力と創造力を広げることも学習できよう。逆に大人にとっては、中学生ならではの視点や感性、柔軟な発想が強いインパクトになると考えられる。中学生らしい視点を生かした地域の歴史の新たな魅力創出が可能となったばかりでなく、地域全体に新たな視点で歴史をふりかえることの動機付けをもたらすのではないだろうか。

## 5. おわりに

平成 24 年度から完全実施される学習指導要領が平成 20 年に公示され、総合的な学習の時間や選択授業の削減が示された。地域住民との連携のありかたを大きく見直す状況になると思われ、地域で学ぶ活動を教育課程にどのように位置づけ、具体的に活動内容をどう計画・実施していくのかが大きな検討課題となる<sup>29)</sup>。大潟中学校においても、今までの 3 年間にわたる教材開発の学習活動が評価され、平成 21 年度も「大潟村歴史紙芝居」の続編の創作について、3 年生が選択社会の授業において取り組むこととなった。新しい学習指導要領の実施への移行期にあたり、地域住民とともに具体的にどのような形で学習活動を支援し、そして教材化し、地域社会にどのような形で還元したらよいのか、そして地域全体で地域の歴史を学ぶことの意味をどのように定着させればよいのか、検討している段階である。一方、マネジメント面では、教材としての紙芝居を 2 年連続で開発する形である。学習支援者も方向性や役割分担の位置づけをはっきり理解しており、一層の円滑な進行がもたらされと考えられる。これらの実践を通じて、学社融合のマネジメントの普遍化について検討していきたい。

〔付記〕本稿は、日本生涯教育学会第 29 回大会における発表を加筆修正したものである。

## 引用・参考文献及び注記

- 1) 本稿では、学社融合の「融合」を、学校と地域社会がそれぞれの人的・物的資源を共有しつつ共同の学習活動を行う意味とし、学校と地域社会が互いに人的・物的資源を提供したり、協力したりする「連携」と区別して用いる。また「協働」は、学習活動に関わる様々な立場の人たちが協力して具体的な活動を行う意味で用いる。
- 2) 文化庁芸術拠点形成事業（ミュージアムタウン構想の推進）。文化芸術拠点の形成を目的に文化庁が実施している事業であり、他の館のモデルとなるような、美術館・博物館

- の自主企画事業に対して重点支援が行われる。
- 3) 薄井伯征「学社融合による地域の歴史を後世に伝える教育教材の開発と生涯学習支援上の課題 -『大潟村歴史かるた』づくりを通して-」、秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要、No.29、2007、pp.113-129
  - 4) 薄井伯征「秋田県大潟村における学社融合の実践に関する一考察」、日本生涯教育学会論集、No.29、2008、pp.201-210
  - 5) 薄井伯征「学社融合のマネジメントに関する研究 -秋田県大潟村における実践から-」、秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要、No.31、2009、印刷中
  - 6) 前掲書 4)
  - 7) 前掲書 4)
  - 8) 有薮格「開かれた教育経営 -学社連携・融合教育論」、教育開発研究所、2007、pp.152-210
  - 9) 佐藤晴雄「学校を変える 地域が変わる -相互参画による学校・家庭・地域連携の進め方-」、教育出版、2004、pp.137-181
  - 10) 前掲書 4) 及び 5)
  - 11) 前掲書 3)
  - 12) 前掲書 4)
  - 13) 前掲書 5)
  - 14) 前掲書 3) 及び 4)
  - 15) 前掲書 3) 及び 4)
  - 16) 前掲書 3)
  - 17) 前掲書 3) 及び 4)
  - 18) 前掲書 5)
  - 19) NPO 法人あきたパートナーシップ「秋田県ボランティア・NPO 活動ニュース 中央地区版 かだれ」、Vol.37、2008、pp.2-3
  - 20) 大潟村における学校週休二日制事業「きらきら塾」は、平成 21 年 1 月 17 日に村内で「昔っこ遊び」が行われ、かるた取りや紙芝居上演が行われた。また、同年 3 月 7 日には大潟村人形劇同好会による「人形劇」が行われたが、人形劇の前に紙芝居の上演が行われた。いずれも保育園児から小学生までの児童と、その保護者が参加した。
  - 21) 前掲 20)
  - 22) 大潟村では平成 21 年 2 月 22 日に、大潟村芸術文化協会が中心となり、初めての手作りミュージカル「大潟干拓物語」の上演が行われた。上演後、協会会員から出た発言である。
  - 23) 前掲書 3)
  - 24) 前掲書 19)
  - 25) 大潟中学校「大潟中学校だより『サルビア』」、平成 21 年 1 月号。なお、この文中の「融合」は前掲 1)の意味ではなく、「混じり合う」意味である。
  - 26) 大潟中学生の意。
  - 27) 東北電力主催の、東北 6 県と新潟県の中学生を対象とした作文コンクールである。平成 20 年度の基本テーマは「大切にしたいもの」であり、平成 20 年 6 月 23 日から 9 月 16 日まで募集が行われ、646 校から 27300 編もの応募があった。
  - 28) 大潟中学校「大潟中学校だより『サルビア』」、平成 20 年 12 月号
  - 29) 前掲書 8) pp.57-73